さまざまな形への欲望[1]

ジャン＝リュック・ナンシー、ジネット・ミショー
（訳＝西山雄二、石田奈生）

ジネット・ミショー　芸術に関するあなたのすべての論考、とりわけ、展覧会「素描への快楽」（リヨン美術館、2007年10月12日～2008年１月14日）に寄せられた最近の著述〔書誌情報は注４を参照〕において、あなたが考察しているのは形の誕生、つまり、形成され、宙吊りになり、変容しつつある形の誕生についてです。さまざまな芸術の複数性、それらの開放性や（目的も、合目的性も、意図もない）宛先についてです。表現する〔現前化させるprésenter〕という芸術の根本的な身振り――それは欲望をともなう身振りでもあります――が論じられており、各々の芸術がつねに特異な仕方で、こう言ってよければ、それぞれの現場に即して形を与えるという緊張感のある快楽が考察されています。あなたはさまざまな芸術同士の近さ、それらがほとんど隣接した状態に関心を示し、諸芸術がたえず隙のない状態、しかし、不可避的に相異なる状態で互いに共存している仕方に興味を抱いています。つまり、諸芸術が一緒に、共に存在しているけれども、集結してはいない状態です。『民主主義の実相』[2]においては、その結尾のある一節において、あなたは再び芸術に訴えており、アイステーシス的経験の重要性を主張しています（私は、芸術史の伝統に結びつきすぎている「美的＝感性的〔esthétique〕」ではなく、「アイステー

---

[1] 〔訳註〕本稿の初出は、« Le désir des forms. Entretien avec Jean-Luc Nancy », *Europe*, n° 960, avril 2009で、のちにGinette Michaud, *Cosa volante, Le désir des arts dans la pensée de Jean-Luc Nancy*, Hermann, 2013に収録された。対談は2008年８－９月におこなわれたものである。

[2] 〔訳註〕Jean-Luc Nancy, *Vérité de la démocratie*, Galilée, 2008.「民主主義の実相」、『フクシマの後で――破局・技術・民主主義』渡名喜庸哲訳、以文社、2012年。

シス的〔aisthétique〕」[3]という表現の方を好みます。あなたの著述では感性的なもの、官能的なものの問い、意味＝感覚〔sens〕――このsensという語のあらゆる方向で――の問いが、美的＝感性的なものよりもつねに優勢ですから）。アイステーシス的経験こそが民主主義の問いの核心や中心なのでしょうが、それは十分に表現されず、とりわけ意味を十分に吹き込まれることがなく、すべてが不確定で、何も定められていません。「芸術」といわば政治的なもの――最適な言葉が見当たりません――の連関をどのように考えているのかをお聞かせください。

ジャン＝リュック・ナンシー　申し訳ありませんが、手始めにあなたの質問を退けなければなりません。あなたが思い浮かべている一節において、私の表現が下手で、不十分だからでしょう。芸術が民主主義の問いの「核心や中心」にあると少しも言いたくはありませんし、ましてや「芸術と政治的なものの連関」を導き入れることもありません。私が言いたいのはまったく別のことです。あの小著〔『民主主義の実相』〕全体で表現しようとしているように、政治的な領域を絆、集団、団体の管理運営を担う領域として明らかにし、際立たせたかったのです。意味や共存在（存在が共存在であるとすれば、あらゆる点において、共存在とは端的に存在することの意味です）を担う領域としてではありませんでした。そうした絆が長続きするようにし、絆を通じて、人間関係の彼方で、「意味」のありうべき形が流通する――戯れる――ようにしたかったのです。何らかの意味を提起したり、仮定したりするのではなく、ましてや、もちろん意味を吹き込みたかったわけではありません。これこそが、政治に課さなければならない制約なのです。次に、芸術の事例を通じて示したかったのは、意味のありうべき形の次元（「芸術」「愛」「思考」「知」「信」……といった言葉で差し示すことのできる次元）のことです――（「一連」という言葉が許されるなら）いかなる一連の言葉であろうと、存在論的に多数で相異したままの次元（たとえば、さまざまな「芸術」です。諸芸術の領域は意味一般の本質的な多様性の範例であるからです）のことです。そもそも多数的なこの次元は、つまり、みずからを探し求め、みずからを形成しては変形し、それでいて、完成した

[3]〔訳註〕アイステーシス（aisthesis）は古代ギリシャ語で、感覚から感情までの広義の「知覚」を指す言葉。

ひとつの形象のうちにけっして託されないさまざまな形の次元なのです。「芸術」や「愛」、「思考」の形象などというものはないのです……。そうした芸術の戯れはときに過酷で危険で錯乱しており、つねに不安げですが、しばしば熱意を宿し、創意に富んでいます。この戯れはあらゆる欠落や過誤などをともなって、今日、そうした形への欲望を演出しているのです。

しかし、ひとたびこう明確にしたなら、さらに先へと進まなければならないでしょう。まず、「形」が何を意味するのかをもっと注意深い方法で述べる必要があるでしょう。手短に言うと、形は意味と同じくらい多くのことを表現しています。形と意味はともに、露呈した差異を表現しています。表面化し、識別されるようになった差異が示されるのです。意味の場合、差異はみずからを「外へと優越させます〔ex-primer〕」。その外へと送られ、伝達されるのです（意味というものは単独では存在しません）。形の場合、差異はみずからを「外へと定立します〔ex-poser〕」。みずからを示し、しかもそうすることで、みずからが現示される場と戯れを、そのつど真新しい場と戯れを開きます。ベートーベンやアルバン・ベルクの四重奏曲、無名の歌やルーリードの歌を聞くとします。あなたはある形の運動に捉えられ、形が退行し進化し移行する状態のなかにいます。あなたのなかで、あなたの周りで形が形成され、みずからに形を与え、変形します。かくして、形は「意味」を形成しますが、そのとき、この意味を変化させ、変形し、形成し直し続けるのです。こうして、意味と形は互いを託し合うことはありません。反対に、こう言えるかもしれません、両者は互いを託し合うことを慎み、その結果――これは逆説的な点ですが――、「形」と「意味」において互いを措定することを慎む、と。実に単純なことです。ベートーベンの四重奏曲はたえず演奏されてきましたが、それはなぜでしょうか。それは、その形が解釈される度に変形し続けるからです。そして、このことはあらゆる芸術作品が秘めた本質的な何かを言い表しています。

次に、言い足しておかなければならないでしょうが、政治が絆の意味ではなく、絆の管理運営である以上、政治とは果たされざる務めです。絆に意味や形を与えようとするのではなく、その結び目を作り直し、締め直さなければなりません。政治は本質的に完成しませんし、（どんなに切望しようとも）その成果を成し遂げることはありません。こうした理由からも、政治はつねに約束するけれど、けっして約束を守らないのです。芸術（思考、愛……）は約束しません。芸術とは与えるもの

であって、それは形を与えます。つまり、みずからが形成（変形）されるという終わりなき運動を与えるのです。与えることで、芸術は何らかの意味において何かを完成させます。芸術は定立しますが〔poser〕、しかし、芸術によって定立されたものは委ねられた〔déposé〕わけでも、課せられた〔imposé〕わけでもありません。それは前方に定立されたもの〔pro-posé〕として、外に定立され〔ex-posé〕、外に優越しているもの〔ex-primé〕として定立されます。私たちのあいだでそのように定立され、循環するという目的でもって投げ放たれるのです。芸術とはたえず再び投げ放たれる欲望なのです。

こうして、政治とは、その本質的な不完全さ、さらに言うなら、いわばその意味の欠如を受け入れなければならない領域です。逆に、政治においてこそ、実に個別的な欲望（この欲望はほかの欲望と混じり合うかもしれませんが、政治の場合には「純粋な」状態です）、つまり権力欲が表現され、露呈するのです。ところで、この欲望はたんに悪しきものではありません。私が懸念するに、私たちは今日、権力を、ともかくいかなる権力をも概して軽蔑しようと躍起になっています。権力に即して、形と意味を権力に与える必要があります。しかし、権力とは何かに到達し、結論づけようと欲する欲望でもあります。あえて言えば、権力はみずからの内に優越する〔s'im-primer〕ことでしか、みずからの外に優越する〔s'ex-primer〕ことができません。だからこそ、権力は単独で形と意味を捕まえようとするのです……。ですから、権力に抵抗し、その境界区域へと帰着させなければなりません。権力を解体するのではなく……。

ミショー　まず、明快な論点整理をありがとうございます。私たちはいささか目新しい言葉遣いが理解できなくていつも苦しんでいることがよくわかります。「芸術」「政治」「中心」、そしてもちろん「連関」といった言葉には括弧を付ける必要があったのでしょう！　それはさておき、あなたの目からすれば、分離したこれら二つの領域にはいかなる「連関」も保持されていません――「すべてが政治的であるわけではない」という点は同意見なので、芸術は〔政治〕参加なのか〔時代の〕証言なのかといった議論――しばしばうまく設定されない議論――を蒸し返す必要はありません（参加や証言など、いたるところに目に見えない括弧が付いています……）。とはいえ、やはり、芸術（思考や愛といった欲望に属するあらゆるもの）はある種

の関係や共存在の範例的な経験として価値があります。「アイステーシス的な共同性」の助けを借りて――「アイステーシス的」と「共同性」という語が接近しうるとしましょう（あなたは「素描への快楽」で、リュトモス〔律動〕、「誕生しつつある形の拍動」[4]という主題をめぐってこの表現を用いています）――、「民主主義」という使い古されてはいるけれど長持ちしている意味のなかに、私たちはいかに別の形を、別の意味を開き、立ち上げるのでしょうか。

また、あなたが権力の問いに言及されたので、副次的な問いを示しておきます。今日、「快感原則の彼岸」ではなく、「現実原則の彼岸」をいかに考えればいいのでしょうか。あらゆる欲動について言うと、権力欲動（フロイトのBemächtigungstreib）はその残酷さにおいて、けっしてよりよいものとはならなかったようにみえますし、私たちはその数多くの事例を目の当たりにしています……。あなたが書いているように、権力と意味が対立せず、両者のあいだに「近接と距離」[5]がつねにあるならば、権力の問いに関して、別の特徴線――権力を「軽蔑的されるべきもの」にしない特徴線――をいかに論じ、いかに引くべきでしょうか。

ナンシー　「民主主義」の意味の問いは決定的です。誤解の積み重ねがこの語を苦しめていると思うからです――もちろん、あらゆる誤解と同じく、この場合も何かを明かしてくれますが――。明らかになっていることから始めましょう、つまり終わりから始めましょう。それは、政治とは特異な仕方で不鮮明な概念だということです。政治においては社会の管理と共同性の意味が交差し、衝突します。両者の区別自体が問題含みであるとしても、双方はかなり判別された二つの次元です。あるいはこう言っておきましょう。政治とは社会そのものの近代的構成です――社会とは諸個人や集団の協力のことですが、その欲求の外在化こそが「共同体」の変形、さらには解体をもたらしました。性急に表現すれば、それは意味の領域の近代的構成なのです。この意味の領域はもはや、管理の領域と同質的な方式、いや少なくと

---

[4] Jean-Luc Nancy, « Le plaisir au dessin », dans le catalogue *Le plaisir au dessin*, commissaires de l'exposition : Jean-Luc Nancy, Éric Pagliano et Sylvie Ramond, Lyon, musée des Beaux-Arts de Lyon et Éditions Hazan, 2007, p. 27. 強調は原著者。

[5] *Cf.* J.-L. Nancy, « Des sens de la démocratie », *Transeuropéennes* (Paris), n° 17, hiver 1999/2000, p. 48.

も相似した方式では同定されえません。ですが、「政治的」理念そのものは原則的に、管理と意味の整合性、さらには同質性という理念にほかなりません。

アテネの民主主義と呼ばれてきたものから私たちがつくり出したのは（その歴史上の正確さは重要ではありません）、わずかにそのヴィジョンなのです。つまり、アテネの民主主義は都市国家（ポリス）を管理し、都市国家を意味の場、自由人たちによる共同生活の意味としていました。そうした共同生活、都市国家の権勢と正義を、神々への崇拝とともに確保することが意味をなしていたのです。古代ギリシア人たちは、帝国と地方共同体を同時に解体すること、「神権政治」と呼ばれていたものの多様で複合的な形を解体することに応じていると考えていました。この解体は実際、政治の別の形ではなく、むしろ政治とは別のもの、共同での別の生存様式でした。

こうして、「政治」とはなによりも、即座に、極度の困難さ、つまり、共同の実体なしに共同性をつくること、全員で互いに統治するという唯一の事実から意味をつくるというの要求を指し示す名です。ところで、「民主主義」もまた、ただちに、こうした困難さを割り当てられたものとして現れます。たとえば、奴隷制のおかげで市民らが市民精神の意味を感じながら生活している社会では、それが真の民主主義ではないことがすぐさま明らかになりました。民主主義（今一度言いますが、これは私たちが企図しているような民主主義です）はアテネの人々による共同生活の意味そのものを潤さなければならなかったのです（また、民主主義が市民の宗教全体を含んでいたのは偶然ではありません。彼らの宗教の祝祭、遊戯、悲劇は実体をなしていました）。

ところで、実在したきわめてまれな事例はプラトンです。というのも、民主主義的な都市国家は意味（ないし真理）を欠いているようにみえたので、プラトンは別の都市国家を根拠づけようとしたのです。民主主義とプラトンの真に創始的な対立には一度も十分な注意が払われていません。ただ、都市国家の神々を尊崇しなかったソクラテスの死は雄弁です。この死は民主主義的な都市国家の意味が不十分であると抗議しているのです。

近代民主主義がルソーとともに真に哲学的な――形而上学的、と言ってもいいでしょう――仕方で根拠づけられたとき、今一度――プラトンの場合のように、と言えるかもしれません――、人間がその本質から（再び）根拠づけられたのです。し

かしこのとき、民主主義は、人間が契約を通じて人間となるという人間の本質と結びついています。ただ同時に、社会的争点、力と利害の関係は最初からきわめて明快なので、ルソーはこの同じ民主主義が人間には不可能なもので、仮説的な「神々の民」にのみ可能であると明言しました[6]。こうして民主主義は二度失敗したのです。一度目は欠如によって、二度目は過剰さによって。

一度目に、民主主義という言葉が指し示していたのはまさしく政治体制の名でした。ただし、権利平等（イソノミア）――権利の平等、民主主義のいわば無秩序な大原理――のような体制の名でした。この体制は思慮深い人々ではなく、むしろ多数者による権力へと転化する恐れがありました。その前提として、人々は正義と不正に関する真の知識を示しうるとされたのです。しかし、二度目に、民主主義という言葉はもはや政治体制だけを指し示すわけではありません。権利の平等、法一般による体制に対して、ルソーは人間の真理――「自然」――を根拠とみなしました。ルソーによれば、社会とは不可逆的な方向での脱自然化です。こうして、民主主義は神々にとって良きものなのです。したがって、民主主義とは存在論的な主張であると同時に政治的な命題です。ただし、この政治的な命題は本質上、それ自身の存在論的な根拠との不適合を孕んでいます。

ここから、政治は存在論において（あるいは、お望みならば、形而上学において）根拠づけられてはならないという結論を引き出したいなら、それもいいでしょう。しかし、引き出すべき帰結とは、政治は統治（すなわち、管理、統制、権力）の条件でしかありえないのであって、意味の実現化ではない、ということです。ですから、意味――欲望（ええ、「欲望」を「意味」と名づけることに同意します）――の多様な領域はもはや統治には属さないのです……。

しかし、「民主主義」とは何を意味するのでしょうか。多数派の権力でしょうか。権利平等でしょうか。人間の神的本性でしょうか。みずからを管理する社会でしょうか。みずからに意味を与える共同体でしょうか。民主主義という言葉を理解するために考えられうるこれらの方向性は錯綜しており、おそらく、互いに補い合えるかぎりにおいて、互いに矛盾しています。

---

[6]〔訳註〕「神々からなる人民というものがあったなら、その人民は〈民主主義的に〉統治しただろう。」（ルソー『社会契約論』第３編第４章）

二つの矛盾した帰結が得られます。一方で、私が理解してもらいたい点ですが、「政治」と意味の領域、実存のさまざまな意味の領域とのあいだの明確な区別があります。他方で、統治としての政治が少なくとも、あなたが（この二つの言葉の利点を認めて）「アイステーシス的な共同性」と呼ぶものへのアクセスを開かれたままにするという要求に方向づけられうるという必然性があります。そう、これは矛盾なのです。私たちはもはや、若きマルクスのように、「政治は社会生活のあらゆる領域に浸透するために、別個の領域として消え去らねばならない」と言うことはできません。また同時に、実に明瞭な輪郭をもった「政治的な」領域を切り離すことはできません。いささか似通った事例として、たとえば、ポーランドの「連帯」[7]の人々は、「外面的な政治は国家に任せて、私たちの市民社会を生き長らえさせよう」と表現できると信じていました。

話はここまでにしておいて、あなたの問いの先頭（実際には最初の副次的な問い）に戻りましょう。「民主主義」のうちに新たな意味を立ち上げなければならないとは思いません。民主主義の使い方こそが重要です。つまり、統治機能を前にした万人の平等をその規則とする統治の意味を保ち続けることです。いいですか、ここには議論すべき数多くの論点があります。代表制や直接制、さまざまな権力の関係、国家の主権や国家間の主権などです。また、「意味」「欲望」「実存の形」に関するものはそれとは別のものなのです――今一度言いますが、たとえ、この「別のもの」が政治の行為、選択、参加などにおいてしか作用しえないとしても、です。

ジャック・デリダが「来たるべき民主主義」を論じ、これを「友愛」（それ自身「来たるべき」ものである友愛）のしるしのもとに置いたとき、思うに、彼は結局、躊躇っていたのです――彼自身がと言いたいのではなく、彼の思考が「民主主義」の（複数の）意味における刷新や革新と、政治的領域と意味の領域――両者はつねに一方が他方の意味をなしています――の距離という開放性とのあいだで躊躇していたのです。デリダはアリストテレスのこんな言葉を想起しています。「私たちにとって、善くあることは私たち以外の他のものに基づくが、しかし神はみずからが

[7]〔訳註〕1980年にポーランドで結成された独立自主管理労働組合「連帯（Solidarność）」のこと。社会主義国においてははじめて労働者による自主的かつ全国規模で組織された労働組合で、ポーランドの民主化運動で重要な役割を果たした。

彼自身の善くあることである」[8]。この点について、私ならこう言うでしょう――政治は他者との関係の領域ではなく、集団や集合（や社会）の統治の領域である。集団――この言葉だけを残しておくとして――は他者の他性を知らない。集団は他性のために、他性によってつくられてはいない、と。

要するに、問いはおそらくこうなります。民主主義は他者と、他者の他性と関わりをもたなければならないのか。あるいはたんに、socius[9]の社会性、その「非社会的な社会性」だけと関わりをもたなければならないのか。

*

第二の、副次的な問いは権力〔pouvoir〕です。権力がもはや根拠づけられず、力〔puissance〕の行使だけにとどまっていると、権力は悪しきものとして現れます。どのようにして私たちはあらゆる種類の権力を――偏向した仕方で、民主主義内にある権力さえ――力に変えるようになったのでしょうか。マックス・ウェーバーは「合法的暴力」という表現を刻み込み、これを国家による独占としました。この表現では、「暴力」という言葉によって、「合法的」という語では消し去りはしない疑惑がすでに取り逃がされています。ここにはいくばくかの悪があります。またそれは本当で、異論の余地がないことです。しかしながら、力が何かを従属させるために従属させ、何かを支配するために――しかも、力以外の何かが君臨するようにさせるためではなく――支配するときはいつでも、いくばくかの悪があります。もちろん、政治的な権力はそれ自身の支配のためではなく、他のもののために支配しなければなりません。

またもちろん、いかなる力も行使されれば、かならず力自身を行使するという享楽を求めてしまいます。この享楽なしには、おそらくどんな勢力〔force〕も勢力

---

[8] Jacques Derrida, *Politiques de l'amitié* suivi de *L'oreille de Heidegger*, Paris, Galilée, coll. « La philosophie en effet », 1994, p. 252.〔『友愛のポリティックス』第２巻、鵜飼哲他訳、みすず書房、2003年、49頁。アリストテレス『エウデモス倫理学』VII, 12, 1245b14-19からの引用〕

[9] 〔訳註〕sociusはsociété（社会）の語源となったラテン語形容詞で、「共有している、加盟している、家族親族である、連盟している」といった意味がある。

となりませんし、勢力をなすことはありません。しかし、権力の合法性のなかに力を正統化するものを認め、力の制限、拘束や制裁を正統化するものを認めることが政治思想の一部なのです。けれども、私たちはむしろ反対のことをしてきたのです。つまり、力の行使がみられるいたるところで、私たちはこの力を熱心に告発し、さまざまな用語の相違（まさに合法性に由来する相違です）を忘れて、しばしば「権力」と名付けるのです。それはもっともなことで、なぜなら、民主主義における権力が実のところ、いかなる合法性をも欠いているように思われ――また実のところ、独裁的な権力や圧政的な権力などと同列に並べられうるように思われるからです。それはつまり、ただ単純に、（経済的、イデオロギー的、社会的）諸勢力の関係の作用によって合法性は崩壊するということです。

権力が合法化されるのは、もっぱら、その政府が自由な開放性や、意味や欲望の領域へのアクセスを保証することによってです。もちろん、〔合法化されざる力の〕残滓は残ります。力への欲望もまたひとつの欲望であり、また何らかの意味をなすからです。合法性は勢力を消し去りはしませんし、さらに言えば、力による暴力を消し去ることはありません。結局、芸術のなかで、愛のなかで、思考のなかで、欲望は暴力的になりえます。肝要なことは、このことが、私たちが言及した「私たち以外のものに基づく善くあること」にしたがっているということです。それゆえ、権力のなかに力を識別する術をももたなければなりません。たとえ、権力に抵抗する必要があるとしても、です。

このように紛糾した問いの全体については、実のところ、あらゆる形の強大な権力（神権政治、君主制、階級制……）をとるさまざまな思考や習俗を通じて、かなり長い間論じられてきました（論じられていないとしても、含意され、理解されてきました）。民主主義に固有な問題とは、その権力の最初で最後の本質的な合法性をどこに、どのように定めるのか、がうまくわからないことです。

ミショー　あなたが凝縮したやり方でここで打ち明けている話題の中には多くの論点があります。その脈絡のいくつかに取り組む前に、いわば挿入された問いを示しておきましょう。それは付随的な論点で、おそらく取るに足らない変質のことですが、しかし、この論点は対談を始めてからずっと、私の耳をとらえているのです。私は「政治的なもの〔le politique〕」と言いましたが、あなたは「政治〔la politique〕」

と言い直しました[10]。〔定冠詞男性単数〕leと〔定冠詞女性単数〕laのこの戯れの混同は、あえて言いますと、運命的なもの〔限定以前のものpré-determiné〕です。そうした戯れの彼方で、安定させることができない「分有〔partage〕」や「分割〔partition〕」において再定義をたえず必要とする変質にもとづいて、あなたが言葉を発していたのであればいいのですが。限定詞についてのためらいは何らかの区別を要請すると同時に語を定義できないものにします。これがまず第一にあげるべき論点で、こうした限定詞の不在（以前出版された『眠りの落下』[11]では、やはり重要な意味の効果が引き出されていました）は、『民主主義の実相』というタイトル〔*Vérité de la démocratie*には冠詞が不使用〕において私を引きつけました。ここには退引〔retrait〕という重大な身振りがみられます――複数形のタイトルを重視したジャック・デリダなら、「民主主義の諸精神」とおそらく書いたことでしょう。ここにはさらに別の論点があり、あなたの話をより長く伺いたいところです。どのように、いかなる角度において、いかなる正確な論点において、能産的形〔forma formans〕として民主主義を考えるあなたのやり方はデリダの「来たるべき民主主義」と区別されるのでしょうか（「共同＝共通なもの」というあまりに明白すぎる問いは除外しておきましょう）。おわかりのように、すでに別の問いが姿を現しているのです！　それゆえ、この退引という重大な身振りは「民主主義」という語（やこの名において要請される事象）ばかりでなく、おそらくよりいっそう、「真実」という語をすでに別様に開いており、「真実」をまったく別の意味へと変えます（同様に、1968年５月革命の「時代」には、「形」「意味」「欲望」を関連づけることなどできなかったのでしょう。あなたはいましがた躊躇なくそれらを関連づけて、自分は「『欲望』を『意味』と名づけることに同意する」と言いました。つまり、あなたの著作でなされているのと同様に、これらすべての語の「意味」が再び生まれ出づるためには何かが起こっている必要があるのです）。一言で言うなら、いや、ほかの言い方をすれば、あなたが「民主主義のうちに新たな意味を立ち上げなければならない」とは思わないと断言するとき、私はあなたほど確信がもてないのです。

---

[10] 〔訳註〕女性名詞のla politiqueは「政治」を意味し、男性名詞のle politiqueは「政治的なもの」を意味する。

[11] J.-L. Nancy, *Tombe de sommeil*, Paris, Galilée, coll. « Lignes fictives », 2007.〔『眠りの落下』吉田晴海訳、紀伊國屋書店、2013年〕

ナンシー　最後の問いから始めていきましょう。ええ、民主主義の既成の意味を転位させるべきではないと考えます。ほかの意味を加える必要はなく、「民主主義」を定立するという唯一の事実が開くさまざまな賭金の広がりをあきらかにする必要があるのです。「民主主義」を定立するとは、民主主義が現代世界においてそうであることを望み、またそうあらねばならない姿として定立する、ということです――つまり、少なくとも、すべての人に統治の権利を与える超越的な根拠を欠いた政治体制として定立するということです。「形而上学的な」賭金（存在論的、哲学的、文明的、とどんな語を置くこともできます）として私が取り出そうとしているものは新たな意味ではなく、何らかの含意や結果であり、それはある前提から生じます。その前提とは、民主主義が、統治という万人にとっての唯一の権利や平等・自由の彼方へと向かわなければならない「人間」を想定するというものです。それは、市民としてみずからを統治しつつ、この統治が最終の目的ではなく、ほかの目的のための手段であることをあきらかにする人間です。この手段とは、つまり、こうした人間を無限に超え出るような人間を生み出すための手段のことです。人間がみずからの意味をもつのは君主の臣下かつ／あるいは神の信奉者としてであるとかつて考えられていたのに対して、人間はまったく独りで、君主や神なしに、別のところに、無限に、統治の彼方で、みずからの意味を得なければならないと考える必要があるのです。

次に、「私の発言とデリダの『来たるべき民主主義』はいかに異なるのか」という問いです。ほとんど同じですが、はっきり異なっています。ほとんど同じというのは、私が思うに、「来たるべき民主主義」は政治体制として理解される「民主主義」とは当然別物であり、デリダは「友愛」というモティーフを通じて何か……こう言ってよければ、「超越する」何か――政治――を導入していたからです。しかしながらはっきりと異なっているというのは、政治的な意味合いを外れて民主主義の意味を拡大したり、投影したりしないほうがよいと私は考えるからです。むしろ、（政治的）民主主義が採用されるなら、他のもの、すなわち政治によって引き受けられえないものが賭けられるのだと表現したいのです。

「政治的なもの」／「政治」〔« le/la » politique〕に関して言えば、私は実際、この対談で、また最近はほかのところで、ついに無意識の癖になってしまっていた男性形の方〔le politique政治的なもの〕を捨てる決心をしました。「政治的なもの」

は多少流行のように用いられ、「政治」は「政治家のための政治〔la politique politicienne〕」と理解されています。「政治家のための政治」では、すでにかなり前から軽蔑的な意味をもつ形容詞〔politicienne〕が用いられています。この形容詞は同音異義の実詞〔politicien政治家〕に由来しますが、この実詞の方は軽蔑の意味なく、政治家という職業に携わることなく政治的な影響を与える人物を意味します。この価値の変質は現代民主主義の歴史のなかで偶然に生じたわけではありません……。

「政治的なもの」という表現をフィリップ＝ラクー・ラバルトと私は1980年代に用い、「政治的なものについての研究センター」を設立しました。それによって私たちは、その行使や行為とは区別されたこの事象の本質を（カール・シュミットのdas Politiche〔政治的なもの〕のあとで）指し示そうとしたのです。しかし、このような区別〔「政治的なもの」／「政治」〕をなすことは正当なのでしょうか。それは興味深い主題でしょう……。「政治的なもの」の本質とは、政治的機能の行使のうちにあるのではないでしょうか。さらに、「政治」は、たとえわずかであっても、その価値を下げるリスクを冒して、「政治的なもの」から区別されなければならないのでしょうか。それに、男性形の方〔「政治的なもの」〕はすでにしばらく前から放棄され、もしくは単純に無視されているように私には思われます。デリダも、バディウも、ランシエールも、この表現に頼ってはいません。考え抜いた挙げ句、私はこう思っています。ある時代をこの男性形〔政治的なもの〕の方へと導いていた配慮は（「政治家のための」）政治活動の危険な価値低下から生じていたのです。また同時に、一方でこの語を（男性優位的なものではないので、この男性形によってではなく、その「本質」的な効果によって）理想化し、まさしく民主主義と結びつけられる過度な期待を刷新するやはり危険な試みから生じていました。ところが、私が思うに、政治の領域と、こうした期待に関わる領域、すなわち、意味と真実の領域とを明瞭に区別する必要があるのです。

その結果、「政治」が下位にみえるということがあってはなりません、もちろんのことです！　だが……どう言ったらいいのでしょう、医学との比較を試みてもいいでしょうか。政治がおこなわれるのは、人々を生きている状態にするためです。この語を逸脱さえしてしまう、その強く広い意味において生きている状態――デリダが理解しようとしたような、「生き延び〔sur-vie〕」の状態にするためです。し

かし、こうした比較によって、医学の目的と生（もしくは思考、愛、欲望、形への関心など）の目的を混同してはなりません。医学は安定や回復、維持を目的としうるだけです。生や「生き延び」に対して何一つ提供することはないのです。そして、実に問題含みな混乱によってこそ、私たちは医学上の目的――延長された生、回復された生、化学により成り立つ生、調和のとれた生など――をほかの目的としばしば混同してしまうのです。

ミショー　あなたがしばしば主張しているところでは、政治を根拠づけたり、根拠づけ直したりしてはならず（あなたはこの視点から1968年５月のことを相当疑っています）、構想中のさまざまな形の欲望をただ受け入れるべきです。政治は、何であれ既定の仕方での共同化を引き受けることではもはやありません。それは、権利を欠いたまま価値の外に置かれたものへ、非等価なものへ、あなたが評価しえないもの、計り知れないものと名づけたもの――あの「一連」の形、何よりもまず、開かれた無限のさまざまな形を再び取り上げるなら、愛、芸術、欲望、歌、ダンスです――へ、場や空間、権利を与えるでしょう。それゆえ、私たちはアポリアを前にしているのです。一方では、私たちは、意図、意志、目的などに等しい政治をもはや欲してはいません。（68年５月はこの大きな変化の症候であり、そのような共同化において裂け目を開き、他のコミュニケーションへの声をもたらし、呼びかけをもたらします。）また他方では、行為の目標、予想、計算がやはりかつてないほど必要となっているので、それらを先延ばしにするわけにもいきません。あなたの思考全体（おそらくあなたはこの明らかに不十分な要約を受け入れてくれるでしょう……）は始まりという支えを欠いたまま、こうした論点に位置します。それでは、根拠づけとは異なる、政治における始まりをいかに考えればいいでしょうか。別の政治が浮かび上がってくるためには、どのような身振りが必要でしょうか。

ナンシー　まずはじめに、68年の主題に関するあなたの余談に関して指摘しておきましょう。「再根拠づけ」のモデルを目指しているように思われたものに、私は当時、疑いをかけたのかもしれません。しかし、それは結局、取るに足らないことでしたし、本質において、68年５月は私にとって、むしろ、政治的な再根拠づけを宙吊りにすることでした。政治的な再根拠づけの一形式である革命の宙づりとまった

く同じように。

次に、あなたの質問に戻りましょう。あなたの言うことはごもっともですが、あなたが先ほど述べたことで、おそらく礼儀上留保されたままになっていることの先へと進みましょう。あなたは当然ながら、次の二つのことを考えているのでしょう。（1）「政治」と「さまざまな形の開かれ」を過度に分離してしまうと、目標や計画のあらゆる可能性の彼方に政治を追いやってしまう恐れがある。そうして、真の存在理由を、あなたが書いているように、予－見することの真の理由を、もはや政治に与えられなくなる恐れさえある。（2）「価値の外にあるもの」の次元は全面的な不確実や不確定に、運の良し悪しに委ねられている。また、政治の次元のように、ともかく何かの目標や計画、理想、理念を受け入れられない状態に委ねられている。

このようなアポリアを生じさせる必要があるという点について、あなたに同感です。さらには、状況を深刻なものとするために、ある親しい人物が私に言ったことを引き合いに出せるでしょう。「だが、あなたは、私たちの国（フランス）の今日の状況を認めるばかりです。政治は共同的なものに関するいかなる真正な地平も定めることはなく、最低限のバランスを気にかけ、さまざまな実権の圧力を受けながら、情勢を管理しています。それ以外のこと（「文化」「宗教」「思考」）に関しては、良き意図の波に、雑多な背景のなかに漂っているのです……。」

たしかに、そんなふうに表現することはできますね。それに対して、私はただこう応答します――まず、私は「別の政治」を定めようとしてはいません。明晰判明な思考の数々を白日の下に晒そうとしているのです。どうでしょう、「政治」は「共同存在の仮定」を意味しなければならないのでしょうか。実際、「共同存在〔être commun〕」や「共同態〔être -en-commun〕」――両者は実に異なっています――といったものはあるのでしょうか。政治がそのような仮定を意味しないとしましょう。また、共同存在などないとしましょう。外在的に存在しているようにみえるとはいえ（「共同〔commun〕」が実詞的な述語であるとしても、「共同での〔en-commun〕」は副次的な述語です）、端的に存在すること（共同、判明、単数、複数……）にとってやはり重要である共同態があるとしましょう。そうした状況を仮定すると、次のようによく考える――また、もちろん考案する――必要があります。共同態（l'en-commun）の「en〔内〕」、このen〔内〕や〈私たちのあいだ〉が担われ、

表現され、包み隠され、展開されうるような形を――その補強や疎通のおかげで――展開させるにあたって、「政治的」領域がいかに限定されるべきなのか、と。それこそがなされるべき仕事です。おそらく、政治においてリベラルである人物――民主主義者――なら誰でも、結局、政治がすべてを引き受けてはならないと主張するでしょう。でも、まず第一に、正確に言って、なぜそのような状況なのでしょうか。またそれゆえ、それ以外のことをどのように考えるべきでしょうか。例えば、芸術的な形です。芸術的な形はどこまで公的支援に依拠するべきなのでしょうか。そういった支援はどこまで芸術を援助し、どこまで中立化し、どこまで無力にすることができるのでしょうか。「文化的な政治」とともに、何が起きるのでしょうか。

別の事例を引くならば、サルコジやサラ・ペイリン[12]が宗教について話すとき、非宗教的で民主主義的な善良な人々はみな抗議します。それはかまわないでしょう。でも、政治の側が正義や幸福への原動力をもち合わせていると多少とも理解されているとき、実のところ、政治と宗教の分離はどのように考えられるのでしょうか。宗教は必然的に、不正や貧困の精神的な埋め合わせという責任を負うのでしょうか。

そして、保健衛生についてはどうでしょうか。この問いは非常に込み入っています。政治はどの程度まで、どんな代価も厭わずに（つまり、公共財政の均衡を代価にして）保健衛生の費用を負担するべきでしょうか。そうした類いの保健衛生（長寿、救命、延命治療……）はすぐに限界に達して、別の使い道、すなわち「健康」と呼ばれるものの別の形がまちがいなく重要であることをおのずと明らかにするのですから。

もちろん、政治はいくつもの目的を定めなければなりません。そうした目的は、芸術、健康、生、死、愛、思考の形が覚醒し開放されうるために必要な、数多くの前提条件でもあります。そして、これらの形はまた、その固有の試練のために、一

[12]〔訳註〕ニコラ・サルコジはフランスの政治家で、2007-12年にフランス大統領を務めた。過激で強硬な移民政策をとり、イスラーム教徒の女性が着用する衣服ブルカに対しても不快感を度々示すことで、イスラーム教徒への反感をあおったとされる。サラ・ペイリンはアメリカ合衆国の政治家で、2006-09年にアラスカ州知事を務めた。キリスト教福音派の熱心な信者で、人工妊娠中絶、同性婚などに反対している。

定の政治的な条件を要求しなければなりません。このことは〔政治とこれらの形の〕双方にとって激しく、無理の多い試練を必要とします。しかし、〔政治とこれらの形の〕境界線の妨害も、仮定されたものへの責任を負うように漠然と狙いを定めたままの「政治」への呼びかけも必要とされるわけではありません。

実際、これこそが、私が関心を寄せる政治において、政治活動と比べてそれ以上に、目指され、要求され、期待されていることです。国家は規制、安定化（それが国家の仕事、すなわち安定性、stato〔平衡〕です）、予防、統制自体――ええ、私はあえてこの語を用いています――という役割を果たします。このことはもちろん、市民相互の統制のもとでおこなわれます。しかし、そうした市民の統制は、国家が消滅したり分離されていない状態を期待することの目的や、〔市民の〕共同生活を引き受ける権力の目的にはなりません。今日、アメリカの新保守主義（ネオコン）が国家を利用して景気過熱を制御していますが、人々は「完全な国家」に対する自由主義的な罵倒をばかにしています。しかし、ヨーロッパで芸術、文化、またもちろん宗教が「政治的」であると宣告されるのを耳にするとき、人々はこの「政治的」という語がこれらの発言において何を意味するのかと問います。つまり、ほとんど考慮されないマルクス主義や社会主義の跡を辿って、「政治」（ポリスという語によって、創設的モデルが投影されるこのギリシャの都市によって、往々にして裏打ちされ、維持された語です）をありとあらゆる形に対するひとつの形とみなす習慣が生まれるのです――また、すべての形に対する形である以上、政治はあらゆるものを吸収し受け入れなければなりませんし、また同様に、それ自身を解体し、社会が共同体へと広範に変容するなかで消え去らなければなりません。これら二つの公準は右派からしても左派からしても「革命的」でした。また、この二重の公準は十分に検討され、脱構築されてきませんでした。

こうした直観的な要約によって、私がかなり明快に、かなり先まで理解したと言うつもりはありません。断じてそんなことは言えません！　でも、そうした直観こそがもっとも重要だとしておきます。「政治」に何ができるのか、何をなすべきか、「政治」に何ができないのか、何をすべきではないのかについて私たちは見通しをもっていなければなりません。政治はつねに、みずからがなしうること、なすべきことに対して、多かれ少なかれ、不十分であったり過剰であったりします。反対に、ある形が成功する、しかも、完膚なきまでに決定的に成功するような瞬間や場

――「恩寵」と言うこともできるでしょう――がつねにあるでしょう（身振り、素描、歌、愛撫）。決定的に――それが永遠回帰するという意味において……。

Jean-Luc Nancy et Ginette Michaud

« Le désir des formes. Entretien avec Jean-Luc Nancy », *Europe*, n°960, avril 2009.

Reprinted by permission of Jean-Luc Nancy and Ginette Michaud.

訳＝西山雄二（東京都立大学）、石田奈生（東京都立大学博士前期課程）